

あのマチ  
このムラ  
・地域おこし活躍中

No.20

洞爺村の事例

自然と文化と農業の調和した村づくり  
神秘の湖、感動充実創造の村

◇洞爺村の概要

洞爺村は明治二〇年香川県丸亀藩十三橋政之ら二二戸七六名が大原に移住したときに始まる。昭和六一年に開基百周年記念式典が行われた。昭和五二年には有珠山が突如噴火し、農作物を中心に火山灰による大きな被害を受けたことは記憶に新しい。

洞爺村は北海道の中南部に位置し、支笏洞爺国立公園にあつて、南は虻田町、西は豊浦町、北は留

寿都村、東は壮瞥町に接している。総面積は一一・三、六九平方kmで羊蹄山麓に続く高台平坦地と湖に沿つて南傾斜となり湖畔にわずかな平坦地をもつ下台地に分かれている。

交通の便もよく札幌市へ約二時間の距離にある。これが都市への中間野菜生産地帯として発展した原動力となった。

気象は下台地域では内浦湾の影響を受けて海洋性で、春先が不順で晩秋が良い気候である。年間平

均気温七、一で積雪は約八五cmである。

世帯数七六七戸・人口二、〇四〇人が居住している(平成九年)。

◇洞爺村農業の現況

洞爺村の農家戸数は一八一戸、うち専業農家は一三三戸(一九九五年農業センサス)で、経営耕地総面積は一、四五四ha、うち田は一〇二ha、畑は一、三五〇haとなっている。

農業生産額は平成八年で耕種二

三億四千四百万円・畜産一億二百万円で合計農業粗収益は二五億四千六百万円である。

洞爺村の農業は馬鈴しょ、甜菜、豆類、野菜に肉牛を加えた複合経営が確立されている。

昭和六二年三月虻田町・豊浦町・洞爺村・大滝村・壮瞥町の五農協が合併し「とうや湖農協」が発足し、洞爺村農協は支所となった。

この頃から農産物の輸入自由化・農畜産物の価格低迷など農業をとりまく情勢が変わり、また農協広域合併により生産形態がより一層多様化を増してきた。このため洞爺村では野菜の生産に重点をおきその振興に努めた。平成八年に野菜だけで一三億七千九百万円と他作目を大きく引き離している。

◇洞爺村野菜の振興

洞爺村の施設園芸の始まりは、昭和三年、木骨ビニールハウス

によるトマト栽培が始まる。昭和  
三七年D型ハイブハウスを導入、  
一二人が促成トマトと抑制キウウ  
リ栽培を始めた。昭和四三年に農  
協が共販を開始、共同育苗ハウス  
の建設、先進農家滞在研修制度が  
発足した。昭和四六年第二次農業  
構造改善事業で傾斜地の基盤整備、  
大型施設園芸団地づくりが始まっ

た。昭和四八年第二次農業構造改  
善事業でトマト用大型共選機が導  
入された。ハウス施設園芸でトマ  
ト・セルリー・ミニトマト・レタ  
ス・メロン・赤シソがあるが、セ  
ルリーは全道の七割を生産、赤シ  
ソに至っては面積は少ないが全道  
の九割のシェアを誇っている。

### ◇佐伯利彦氏の功績

洞爺村の野菜振興には佐伯前組  
合長の功績が大きい。佐伯前組合  
長は洞爺村農業の豆類・スイート  
コーンから出る豆がら・トウキビ  
がらを利用しての肉牛飼育を昭和

三〇年代から導入した。これは丁  
度そのころトラクターの導入によ  
る農耕馬の廃止により空いた馬小  
屋を利用しての肉牛導入という一  
石二鳥の複合経営であった。一時  
肉牛飼養農家は七〇戸で一、五〇  
〇頭の肉牛がいた。現在は三〇戸  
で一、〇〇〇頭前後である。

佐伯前組合長は野菜の本州への  
移出を促進するため全道に先駆け  
て「野菜真空冷却施設」を昭和五  
六年に導入した。これは当時画期  
的なもので、村の補助金二、五〇  
〇万円の外は農協の自己資金五、  
三五九万円を投じて完成した。こ  
れによって洞爺村の野菜は市場に  
於いて高い評価を得たものである。

現在は国の補助金も得て、平成  
一〇年度に「野菜集出荷施設」  
(人參洗浄選別施設及び真空予冷  
設備)を六億七、七八〇万円で建  
設した。

また洞爺村では温泉がなかった  
が、昭和五七年温泉ボーリングに

## 農業生産額

(農林水産統計年報)  
(単位：百万円)

年	耕					種				小 計
	米	麦類	雑穀豆類	いも類	野 菜	工芸作物	果実	その他		
62	136	0	306	221	698	395	4	27	1,787	
63	111	0	365	123	839	331	8	31	1,808	
元	100	0	472	283	876	344	8	8	2,091	
2	108	0	405	340	950	315	6	55	2,179	
3	95	0	479	350	1,160	370	7	48	2,509	
4	86	1	425	299	1,408	303	11	18	2,551	
5	93	1	312	235	1,258	251	17	11	2,178	
6	9	1	387	282	1,474	285	8	28	2,474	
7	107	1	333	320	1,469	244	8	30	2,512	
8	94	1	251	368	1,379	224	12	15	2,344	

成功、現在温泉源を四基所有している。これはかつてキュウリの温室に利用されていたが、現在は「プラグ苗」の生産施設に利用されている。

### ◇共同育苗ハウスの利用

昭和四六年より主要作物（トマト・レタス・サラダ菜・白菜・ナス・南瓜）について共同育苗を実施、育苗施設面積は五〇〇㎡になる。平成三年より共同育苗施設の使用を変更し、プラグ苗の生産でレタス・キャベツ・ブロッコリー等の共同育苗を実施、育苗施設面積は二棟で四二〇㎡になる。

このプラグ苗生産施設整備事業は高収益農業促進事業として「とうや湖農業協同組合」が平成六年に事業費二、四八六万円うち洞爺村補助金が一、八六四万円で建設したものである。この方式は平成三年より農業改良センターの指導により、新技術であるセル型苗の

導入を目的としたプラグ苗導入研究会を結成し、試験研究を重ね、苗の生産体系を一貫したシステムラインにのせることによって省力化と健苗、均一苗による質的向上を図り、畑かん事業導入による収益性の高い野菜栽培にとり組めることになった。

### ◇野菜振興の組織づくり

前述したように洞爺村の野菜栽培が本格化したのは昭和四〇年頃からで、昭和四三年に農協が野菜販売の取扱を始め、昭和四四年に共選を開始した。かつて洞爺村は野菜栽培地帯としては後進地であったが、それが急速に進展したのは全村あげて野菜振興の組織を作ったことにある。昭和四一年に洞爺村蔬菜園芸研究会の発足をはじめ、その後七生産組織を育成し、その活動によるところが大きい、とくに青年層の意欲と生産技術の向上が図られた。

ハウス栽培主要作物の推移

単位：㎡

年度	トマト	キュウリ	メロン	レタス	体菜	セルリー	その他	計
62	28,000	5,000	56,000	28,500	17,000	210,000	53,500	398,000
63	25,000	1,500	40,000	20,000	17,000	180,000	53,000	340,000
元	25,000	1,500	45,000	25,000	17,000	180,000	46,500	340,000
2	24,000	1,200	46,000	21,000	16,000	182,000	49,800	340,000
3	20,000	1,000	46,000	18,400	15,000	190,000	49,600	340,000
4	20,000	1,000	37,000	19,000	15,000	190,000	58,000	340,000
5	20,000	—	35,000	10,600	10,000	190,000	—	265,600
6	20,000	—	35,000	9,000	7,000	180,000	—	251,000
7	20,000	—	28,000	13,000	1,000	110,000	—	172,000
8	24,850	—	28,450	9,000	1,800	70,000	—	134,100

野菜栽培は各組織に基づき行われ、個人プレー的行動が行われないうような生産物の共同共販体制を整備して、生産農家が安心して生産活動に専念できるようにしている。例えばセリリーについて周年出荷が出来るように五月～十二月の八ヶ月間各農家が分担して作付をしつづめる。

### ◇土肥やせ

#### クリーン農業事業

この事業は全額洞爺村予算五四五万六、〇〇〇円で実施している（実施期間平成七年度から平成十一年度）。これは生産性の高い土づくりを目指し、連作障害が起らないよう輪作体系の中に休耕地を作り緑肥用作物の導入による土壌改良を推進し、クリーン農業にとり組む。また農村環境整備のため農村景観に配慮した景観用緑肥作物の導入を推進し都市間との田園交流の場の創設、さらに産地形

成ブランドを目指すものである。

対象作物は緑肥用として、えん麦・ハイオーツを全耕作地一、六〇〇畝の二〇分の一の面積、景観用として、ひまわり・ハゼリソウ・マリーゴールドを全耕作地の一〇〇分の一の面積で実施することとし、助成率は二分の一である。

### ◇洞爺村ブランド

#### 加工研究センター

この施設は地場農産物の付加価値を高め、食文化の一翼をになう特色ある製品開発の取り組みのため作られた総事業費一億一、六二四万円・床面積二八八㎡の食品工場である。

これには「洞爺村つけ物研究会」の協力と活動がある。この研究会は昭和五九年六月に発足、会員は婦人七六名で、発足以来一五年目になるが、現在ブランド名「香り漬」として、年間生産、メロンの粕漬、トマトメロンの鉄砲漬、セ

リリーの粕漬、トマト・同醬油漬、トマト・ピクルス、その他「しそ濃縮ジュースピエンナーレ」一万本、シソゼリー・紫蘇ルビー八、〇〇〇個を生産し、年間売上高は

一、四〇〇万円に達する。これまでに「毎日農業記録賞」、「地場産加工コンクール優秀賞」、「ホクレン夢大賞優秀賞」、「北海道産業貢献賞」を受賞している。



▲「しそ濃縮ジュースピエンナーレ」びん詰め作業



▲ハウスでしそ作り



▲洞爺村ブランド加工研究センター

### ◇基盤整備事業

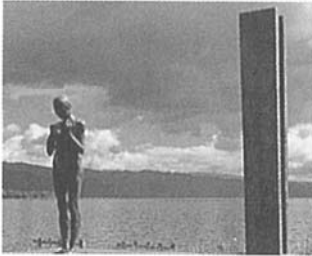
これまでに洞爺村では「国営土地改良事業大原地区畑地かんがい事業」、「道営担い手育成地帯統合整備事業」等により基盤整備事業は大体終わっている。

現在「道営中山間事業」を導入し、農村環境整備公園を作る。農業研修センターは七月に着工する。

これは事業主体は道であるが、洞爺村が二、五%を負担する。これには農業体験農園（一〇mの八〇区画）体験ハウス二棟を作り都市住民に貸して、都市との交流の場とする。全体で六畝になる。トマトが二年間で一、〇〇〇個もなる巨大トマトを作る予定である。



ビエンナーレ  
第2回大賞作品「ANCHOR=錨(いかり)」  
エマニュエル・ハトゾフ (イスラエル)



洞爺湖ぐるっと彫刻公園  
「I was...I will...」 坂東 優

### ◇洞爺村国際彫刻

#### ビエンナーレ

北の豊かな森と湖に囲まれた洞爺村で、村主催により「洞爺村国際ビエンナーレ」が隔年で開催されている。テーマは「手のひらの宇宙」で手のひらに入る、タテ・ヨコ・タカサが二〇cm×三〇cm×四〇cm以内の彫刻である。平成四年から開催して今年が開催年である。世界各国から応募があり、今年はずでに世界六五ヶ国から九五六点の応募があった。一位の大賞三〇〇万円、二位二〇〇万円、三位一〇〇万円、作品は村が買い上げて展示するが、芸術の国際的窓口としての開催の意義は大きい。

### ◇感動充実生活創造の村へ

洞爺村は神秘の湖・洞爺と有珠山に抱かれて、人口二、〇〇〇人がゆったりとそしてしっかりと結



びついて、互いに声を届かせながら暮らしている。ここには四季折々の生命の躍動とやすらぎがある。豊かな水と大地から生産され加工される農産物、そこには感動と生きる充実感に溢れた創造の村がある。

レポーター  
嘱託研究員 竹内 寛